

巻頭言

精神神経学雑誌への投稿を ——電子投稿システム導入にあたって——

細田眞司 日本精神神経学会副理事長
Shinji Hosoda

精神神経学雑誌は115巻を数える世界的にも有数の歴史を誇っている。従来は学位論文のための雑誌の性格もあったため、著名な精神医学者の出世作が多数掲載されてきた。私にとっての重要論文に、高橋祥友「全生活史健忘の臨床的研究」(1989年91巻4号)、高橋邦明「新潟県東頸城郡松之山町における老人自殺予防活動」(1998年100巻7号)、小阪憲司「アルコール性 Wernicke 病の臨床と病理」(1974年76巻5号)などがある。高橋祥友論文は、全生活史健忘という通常の臨床では遭遇することの少ない病態とその治療について、富士樹海からの生還者を多数治療した経験をもとに詳細に記述されている。私自身が担当した全生活史健忘の患者の治療指針となり、数年の経過の後に健忘が回復されるという貴重な臨床体験をすることができた。小阪憲司論文は、ビタミンB1欠乏による症例と病理所見が詳細に記述されており、アルコール依存症のビタミン補充療法を積極的に行う意義を明らかにした古典である。診療報酬審査で点滴にビタミンを入れると削られるといったことが1990年代にあり、妊娠悪阻への点滴中にビタミンを投与しなかったためにウェルニッケ脳症に至った患者がいることを思えば、医学会が警鐘をならさなかったことが悔やまれる。高橋邦明論文は、自殺予防に対して地域の内科医、保健師、精神科医の組織的な取り組みとその成果を示した秀逸な論考で、私の地域活動の1つのひな形になっている。

さて、本年8月1日から精神神経学雑誌においては「電子投稿システム」が導入された。フロッピーでの投稿を20年前から始め、徐々に電子化を進めてきた。学術総会の演題投稿もすでに電子投稿となっているし、PCN誌は5年前から電子投稿が採用され世界中から多数の投稿を受けている。電子投稿システムを利用することにより、投稿規定に従った投稿を自然に行うことができる。投稿する際に、投稿規定に従って原稿を吟味しなすと、論文自体の質が高まるし、ケアレスミスを防ぐことができる。

電子投稿に変更にするにあたり、投稿規定も改訂になっている。最も大きな変化は、臨床報告を原著に統合したこ

とである。原著の規定は「獨創性に富む学術論文、または臨床で得た知識、経験などの研究報告」となった。本誌の原著は重厚長大で敷居が高すぎるといった誤解を払拭し、臨床における知見をコンパクトにまとめた論文を積極的に掲載したいという編集委員会の思いがある。

そのほか、投稿ジャンルとしては総説(文献をもとにした新たな論考)、症例報告(新たな知見、経験を提供する症例に関する報告)、討論(新たな問題提起など)、資料(患者数、患者動態についてのデータ提供、精神保健福祉医療の現状報告など)、会員の声(掲載論文に対する意見、その他の意見など)がある。編集委員会としては、症例報告を多く掲載したいと考え、学術総会での一般演題から投稿を促進する試みを行っている。

109回学術総会(福岡)では、PCN誌編集委員会と精神神経学雑誌編集委員会が合同でワークショップ「精神医学論文の評価と書き方」を開催し、会場からあふれるほどの参加者があった。精神医学論文の評価、学術論文の基本的な書き方、症例報告の意義と提示の方法、統計的な考え方と手法、投稿に際しての注意点などを取り上げた。その内容は、HPに掲載しているのでぜひご覧いただきたい。参考文献も多くあり、投稿に際しては大いに役に立つはずである。

電子投稿システム稼働に伴い、本学会誌も本格的な電子ジャーナルのプラットフォームを提供する予定である。電子ジャーナルの利点は、検索が容易にでき、文献などが医学中央雑誌やmedlineと直結することである。また、スマートフォン、タブレットに対応し、外出先でも閲覧ができる手軽さはもちろんのこと、字を大きく表示したり、図表をポップアップできる、メモがとれる、マーカーが引けるなど、利便性の向上を図る予定である。

会員の貴重な臨床経験、知見が多く掲載されるようになることは、本邦の精神医学、精神医療の土台が強化されることである。編集委員会では、良い素材の論文であれば、査読者が懇切丁寧なコメントで掲載まで導くよう努力している。ぜひ、精神神経学雑誌への投稿を!